

監修：吉村 知哲，田村 和夫

がん薬物療法副作用管理マニュアル 第3版

書評者：末永 光邦(東京医科歯科大学准教授・臨床腫瘍学)

本書は、がん薬物療法における副作用マネジメントにおいて貴重な情報源となると確信する。がん薬物療法の進歩に伴い、副作用マネジメントは年々複雑化している。すでに本書の初版が登場してから6年の歳月が流れた。その間に殺細胞性薬剤、分子標的薬の開発が進む中で、免疫チェックポイント阻害薬の開発の勢いはとどまる気配がない。免疫関連有害事象においては、より臓器横断的なチーム医療の必要性が求められている。

評者はがん薬物療法専門医として長年がん患者の薬物療法に携わってきたが、薬剤師外来や化学療法室所属の薬剤師による服薬指導、投与スケジュール・副作用マネジメントに関する指導、また経口剤アドヒアランスの確認、支持療法に関する提案などにおいて日々活躍されている薬剤師の存在は、外来通院治療を安全に行うにおいて欠かせない存在である。

本書は、総論と各論の大きく2つのパートに分かれており、薬剤

師を中心とした薬剤のスペシャリストによる監修や執筆により充実した内容が提供されている。各論は25項目におよび日常診療で遭遇する有害事象がほぼ網羅されている。構成については、原因となり得る薬剤については殺細胞性抗がん薬、分子標的治療薬、免疫チェックポイント阻害薬ごとに詳細にまとめられ、評価のポイント、抗がん薬以外の原因との鑑別、対策、症例提示と解説までがコンパクトに収載され、副作用ごとに充実した内容になっている。

マニュアル本はいつも手元に置き、必要な時に使用するため、見やすさと読みやすさは大切な要素である。本書は冒頭にPOINTを設けており、こちらを一読しておくことで全体への理解が深まるよう工夫がなされ、次の原因となり得る薬剤情報をまとめた表は視覚的に有効なデフォルトになっている。臨床の現場では、起きた事象について使用中の薬剤との因果関係をまず探ることからスタートす

る。発症時期、リスク因子などからさらに絞り込んだ上で、後出の表を使って他の原因について鑑別する流れは論理的思考において大変使いやすいと思う。

これまでも今後がん薬物療法はチーム医療として行わなくてはならない。その中心は医師、看護師、そして薬剤師である。多職種が薬物療法における共通のコンセンサスを持って安全で効果的な治療の実践、また総論にもある治療における生活への影響を最小限にしてQOLを低下させない工夫がチームとしてのミッションである。これからもとどまることのない薬物療法の進歩に挑んでいく医療従事者のための必携アイテムとして本書をぜひ活用いただきたい。

● B6変型・頁416 2024年3月
定価：4,400円
(本体4,000円+税10%)
[ISBN978-4-260-05367-9]
医学書院刊